
忘れ物

りあめたる

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れ物

【Nコード】

N43060

【作者名】

りあめたる

【あらすじ】

ちよつと（いや、かなり？）ドジな高校生「亜季」が、冷蔵庫の裏側の世界で忘れ物を探す事態に。口を開かなければ普通にかっこいい魔道士と一年は一緒に過ごす悪い予感。これから先、どうなるの？

個性的な裏側の世界の住民たちに助けを求めますが、忘れ物は見つかるのか、、、。

夏休みの宿題

「そこを何とかお願いします。美紀様」

「様じゃだめだなあ、^{あき}亜季」

「え、何気に私の名前は呼び捨て？」

殿とか？じゃあ、神様、仏様、お代官様、お願いします、美紀殿」
電話で拝み倒している相手は、親友の美紀、もとい美紀様、いや今は美紀殿だ。

高校に入ってから、ずっと仲のよい親友で、スパンと竹を割ったような性格の持ち主。本人には言っていないが普通の男より男らしい。
正面向いて、男らしいねなんて言ったらぶん殴られそうだから言わないけど。

「なんで、殿なのかなあ、普通に、ご機嫌取りするなら、姫でしょ。相変わらず、^{あき}亜季ってば、ずれているんだから」
ため息がスピーカーから聞こえてくる。

お願いの仕方を間違えたらしい、じゃあ、姫といいなおすが、電話越しの親友はそっけない。

「大体、今から大量の宿題をこなすってのが無理なのよ。あきらめなさい、開き直りなさい、そして先生に懺悔なさい」

美紀姫の声、冷たい。何年も前からの親友なのに、親身になつてくれないとは。

明後日の朝に学校に完成した宿題を持参して学校に行くには、あと明日丸一日しかないのだ。今日お願いが完了すれば、明日の早朝から夜中までびっちり親友を拘束して、手伝ってもらうつもり、だつて一日で一ヶ月少々の夏休みの宿題をこなすには一人では絶対に無理。

なんとしてもお願いを受理してもらうのだ。

「全部できるなんて思っていないよ、けど数学の『鬼に金棒 近藤』

と、美術の『アルカイックスマイル安崎^{あんざき}』の分だけは、なんとか完成させたいの」

数学の担当の近藤先生は、普段はおっとりとしたやさしげな先生だが、数学の教科書をもたせたら鬼のように強い（計算が）ため、鬼に金棒と呼ばれている。普段が温和そうな表情をしているため、一年生のときなどは宿題を忘れました、えへ、と笑ってすぐせそうな雰囲気だと高を括っていたが、一学期のうちに思い知ることとなる。数学に対しては、まったく妥協をしてくれない先生なのだ。一回宿題を忘れれば、二倍の量に、次は三倍、と十日一割の悪徳貸し金業者も真っ青の金利が宿題についてくる。

そして、美術担当のアルカイックスマイル安崎は、数学の近藤とはまったく違う意味で怖い。仏像の笑みをアルカイックスマイルと呼ぶが、安崎がその笑みを浮かべるときは危険なのだ。口元をぴくぴくさせて、怒りを押し殺しながら長時間続く説教は、葬送曲並^{でうしんぎょく}の眠気を誘う。寝れば、墓場に直行で、成績表に1という墓標が立つことは、有名だった。墓場に棒一本は、悲しすぎる、せめてアヒルをお供えしてもらいたい。アヒルとは成績表の数値の2の事だ、1は墓場に墓標の棒切れ、2はアヒル、3はパンの耳、と情けない呼称がついている。

「そついわれてもなあ。他にも提出はあるし。」

思い出すけど、去年も私達ってこんな会話してなかったっけ？」

親友の冷たい質問に、うつと亜季は声をつまらせた。

他人に指摘されるわけでもなく、毎年宿題をお願いするのは恒例行事となっているのかもしれない。

別に、わざと宿題をやらないでいるつもりではないのだ。長い休みだからとアルバイトをめいっぱい組んで勤務に勤しむ結果、間に合わなくなってしまう。年末年始と夏休み（特にお盆）はパートの人も休みたいらしく、時給がわりといい。

「美紀はもう終わってるんでしょ？ 始業式の帰りに、駅前でランチとデザートご馳走するから」

「ランチもデザートも魅力的だけど、無理なんだって」

「えー、じゃ、おみやの夜食菓子も追加するよ！」

「うわ、卑怯もの。だから、ほんと、無理だって、私もあと数学が半分は残っているもん」

「え」

親友は助けになりそうになりませんでした。

悪足掻き

「ああああ、どうする、どうなる私」

通話の切れた携帯を握り締めて、ベットのの上でもだえてみたけど、いいアイデアは浮かばない。

頼みのつなの親友はだめ、図書館閉まってるし行っても間に合うようには思えない、ネットでコピペしようにも、すごい人から引用しようものなら、ばれるし、ローカルな本の感想文など載っているとは思えない。脳みそを搾り出してアイデアをいくつも出すが、消去法をためせば、全滅してしまう。

他の頭のよさそうな友達は、自分でやりなよ派閥だし、例え答えを写したとしても作文やら絵では丸わかりになっちゃう。丸写ししてもばれなさそうな数学だが、学生の考えることなどお見通しらしい。数学の鬼に金棒の近藤先生は、ご丁寧にも生徒一人ひとりに見合ったレベルの問題集を渡してくださったのだ。本当、小さな親切大きなお世話である。ちなみに、私と同じ問題集を配られたのは、クラスで美紀だけ。

熊のつよしくんみたいに、もたえる。

ニユースで見っていた、マレー熊のつよし君は、パートナーであるメスに餌をとられると、両手で自分の頭をかかえて悶えまわるという、かなり情けない男らしさのかけらもないオスだが。あれはあれで、本人は幸せらしい、飼育担当のお兄さんが言っていた。でも、今の私は悶えていても、少しも幸せじゃない。

「ちょっと、うるさいわよ亜季。いい加減にきなさい」

下のリビングから母のあきれたような声が聞こえてきた。悶え方がうるさかったらしい。

「はい」

気のない返事をして、足を踏み鳴らすのはやめた。

毎年、宿題をどうするかは恒例行事になっているせいか、母親は手助けはしてくれない。小学生じゃあるまいし、自分で計画くらい立てれるでしょうと、色々と自由にさせてくれる有難い親なのだ。まさか、作文を手伝ってくださいなんて言えない。言った次の日には、近所中に立ち話の話題の一つとして提供されて、知り合いのおばさま達から、生暖かい目線で応援されるのが落ちだ。恐ろしい。

『佐藤さんのお嬢さんの話、知ってる？』『ええ、知ってるわ。』

毎年夏休みの宿題を最後まで溜め込んでるんですって。『毎年だったの？今年だけだと思っていたわ』『隣の窓から、宿題が間に合わないとうめき声が聞こえてくるのよん』『まああ、大変ねえ。おほほほほ。』『私の息子なんか、休みが始まると塾通いで時間がないからって、朝早くから毎日進めているのよ。』『すごいわねえ。』

おばさんたちの、会話の幻聴が聞こえてきそうだった。数時間続くエンドレスの会話は、近所の話と人の悪口でいっぱいなのだ。うつぶ会話のネタにされるなんて、ごめんだ。何も話題がなくても、ひねくりだすのが得意技のご近所さんは、帰宅時間から出勤時間、誰のお給料が上がったの下がったのだ、あらゆるプライベートを網羅している。その記憶力を別のものに活用すれば、世の中のためになるだろうに。

とりあえず、手助けが望めないのなら、残った時間を計画的に配分して少しでも宿題を処理するしか方法はない。私も女だ、覚悟を決めなくては。

明け方までに空白だらけにしる英語をこなして、明日の午前中に絵を一時間でこなして、呼んだこともない課題図書の記事を二時間で完成させて、数学を残りに費やして、、、かなりきつそうだけど、いけるかもしれない。

うん、と頷いて冷蔵庫にある、父の秘蔵ウンケルを取りにいった。

テスト前の詰め込みの度に、ウンケル様にはお世話になっている。
親父くさいと後ろ指さされようが、知ったこっちゃない、本当に効
くのだ。

キッチンに行つて冷蔵庫の扉を開けると、絶句して、驚きのあま
り声さえ出せなかった。

我が家の冷蔵庫の扉の向こうは、すがすがしいほどの青空の広がる
草原が広がっている。

冷蔵庫のつめたい冷氣ではなく、もっと気持ちいい空気が私の頬
をなでる。鼻をつんと通る、青臭い植物の匂いと花の匂い。

扉を支える右手に力が入る。

（うそだよな）

自分が、変になつたのかなとばちばちと頬をたたいてみるが、目
の前の景色は変わらなかった。

小説に出てくるような、草原が広がっていて、遠くに山が見えて
いる。電柱や建物らしきものは、ひとつも見当たらない美しい景色。
信じられないけれども、確かに私の目の前に広がっている。見え
るだけではなく、匂いや温度まで感じるなんてそんなリアルな夢は
見たことがない。信じられないけれども、信じるしかない現実が、
冷蔵庫の扉の中にあつた。

すごく綺麗、写真でみた北海道みたいだ。

一度行つて見たいと思つていた景色をもつと見たい。

吸い寄せられるようにして扉の中に一步を踏み出すと、後ろでパ
タンと扉の閉まる音がした。

閉まった扉

一歩踏み出した足元は、大きな岩。

ひんやりする足元だが、気持ちがいい程度の気温のせいか冷たすぎない。

「すごい綺麗。嘘みたい」

亜季はつぶやいた。

目の前には、映画で見たりTVで放送されたような景色が見える。先ほど、冷蔵庫の扉を開けて見えた風景は、北海道のようだと思っただが、一歩入ったせいで視界が広がったせいか写真のような薄っぺらさがない。

右も左も見てみるが、電柱も高圧線もない景色は本当に気持ちよかった。

足元を見ると、、

「糞^{ふん}だ」

扉をあけて踏み出したのが岩の上で本当によかった。あともう一歩進んで岩から降りていたら、踏んでいたかもしれない。いや、踏んでいただろう、周りを見るのに夢中だったから。薄い靴下一枚しかはいていない今の私が糞を直接踏んでしまうのは、痛すぎる。靴で踏んでしまったときだって、大惨事で、道路わきの段差にこすりつけながら歩いたりする。

踏まなくてよかったと心の底から安堵する。

自然なら、動物がした糞の一つや二つはあってもおかしくはないだろうけど、目の前にあるのはいただけない。

「踏まないでよかったー。靴下一枚でウンチ踏むなんて、」

「本当だよ、君がもう一步踏み出していたら腕をつかもつかと思っ
ていたんだ」

「ご親切にどうも。空気もおいしいし、景色も素敵だから足元がお
ろそかだったんだ。絶対危なかったよ。黒ひげ危機一髪って感じだ
ね」

「黒ひげがなんだかは知らないけど、どういたしまして」

親切な人がいるらしい。親切な人が、、って

「誰?!」

亜季は驚いて叫び声をあげて、後ろを振り返った。

振り返った目には、鮮やかな金髪苦笑を浮かべる人物がいる。目
は信じられないほど鮮やかなオレンジ。オレンジ色の目って普通
に見えているんだろうかと人事ながら心配になる。

「今更、誰とか聞かれても困るけど。普通、君の独り言に返事をし
た時点で気がつくべきなんだと思うよ。普通の人と視点が違うのは、
いい点かもしれないけどね」

「よく言われます、トロイとか、思考が少しずれているとか」

初対面の人に自分の痛いところを突かれてしまった。

「とりあえず。初めまして?私の名前は亜季です」

自己紹介するなら、名前からが一般的だろうと名乗る。

「ずいぶん覚えやすい短い名前なんだね。通称なのかな?

初めまして、亜季。よろしくね。

僕は、シュツドルティン・ミラー。ミラーって呼ばれている。

君を迎えに来た魔道免許四級の、公認魔道士なんだ。詳しいことは後でいいかな。

とりあえず明るいうちに町に移動したいんだけど、君は鳥に乗れる？用意できた長距離用の手段が、鳥だったから暗くなると移動できないんだよね。ほんと、困っちゃうよ。町から外れているしさ、道のない場所だったら、もっと便利なのが用意できたんだけど。

揺れるしさ、僕だつて好きじゃないけど、しょうがないよね」

自転車に乗れる？の気軽い調子で聞いてくる、ミラーと名乗った金髪とオレンジの派手な人物は、後ろにいる二羽の超巨大な鳥を指差した。嘴の部分に、馬でいう手綱のようなものがついていて、背中のように引き綱がまわっている。羽に隠れてみえにくいけど、鞍のような椅子の一部がちらりと見える。鳥つて、乗れるもんなんだろうか。

「ゴーカートと、メリーゴーランド、自転車なら楽勝ですが、鳥に乗る自信はまったくないんです。

乗り物に配慮してくれたミラーさんには悪いのですが、とりあえず一度は家に帰ってもいいですか？」

乗れるわけがない。亜季はぶんぶんと首を横に振った。あんな超巨大な鳥に乗るなんてとんでもない。

「亜季の言う種類の乗り物は聞いたことがないなあ。

帰りたいって言うけど、扉なら一年に一度しか開かないから無理じゃないかな」

さらりと恐ろしい発言をしたミラーに、亜季は呆然とした。

扉。通ってきた冷蔵庫の扉が、ぐるりと見渡しても見当たらないのだ。

「ないない、ないない、扉がないーーーー」

絶叫する亜季に、ミラーは頭をかかえた。

(この子、色々と気がつくのが遅すぎる、、、。こんなんで、
一年の間何とかなるのかな)

初体験

「亜季、簡単ですよ」

目の前でうさんくさそうな紹介をつけた男、ミラーはこともなげに亜季に言う。差し出した太い革紐を握れと言わんばかりに押し付けてきた。革紐の先には巨大な鳥がフォーヌがつながれている。動物園で見た、鷲やダチョウなんて目じゃない大きさで、胴体だけで車一台分はある。黄色く尖った爪は一本一本が筆箱ほどの大きさで恐ろしげだし目だって鋭い。

人間になつかせてあるし、元々穏やかな性格で攻撃はしてこないと説明はつけたが、いかんせん、サイズが大きすぎた。

「紐を持つのは簡単ですが、乗れません。無理です」

乗ったことなどないが、馬やラクダくらいなら乗り方自体は理解できるし、移動手段として車がない場所では便利だろうと想像がつく。だけど、鳥は無理、上下左右に不安定に揺すられて空中に放り出されるのがオチだ。パラシュートらしきリュックを渡してもらっていないから、落ちてしまえば確実に地面と痛いキスをするはめになる。

「誰にでも初体験があるんです、ちょっと痛い経験もあるかもしれないけど、大丈夫、僕についてれば、こわくないよ」

「何ですか、怪しげな説得は」

目の前の自称魔道士は、他人が聞いたら誤解しそうな説得をしてくる。

「僕が先導を切れば後ろをついてくるだけだつて。僕が上手に誘導してあげるから、怖いのなら目をつむっていても終わってるくらいだつて。あ、って思ったらおわって、後はふわふわと気持ちいいく

らいだし」

「人の話、聞いてます？」

初体験だの、上手に誘導だの工口すぎる。分かってて言っているんだろうか。

「君も大体頑固だねえ。乗らないと町まで行けないって僕は言っているんだよ。」

山の中で夜をすごすなんてゾツとする。鳥だから夜目が聞かないって何度も説明してるし、明るい内しか移動できないんだよ」

魔道士というのは、人の話を聞かないという職業なのだろうかと思う。四級と言っていたので、段階があるんだろう。一級は、少し強引。二級はマイペース。三級は、頑固。栄えあるミラーの属している四級は、まったく人の話を聞かないだ。勝手に決めてみる。マスタークラスになると、俺のものは俺のもの、皆のものは俺のものの、通称ジャイアンだ。

帰る方法がないと叫んだり、扉のあった辺りを触って探したり、呆然としたり、顔の色だつて白から赤から紫、土色と自在に変化させて（多分そんな感じ、自分の顔色だから見えてないけど）パニックになっている亜季に、説明するから一度町に戻ろうとしか言っていないのだ。自分の都合一方で、亜季に対して特に配慮はしてくれないのが悲しい。

ミラーの言うことを素直に信じるのなら、一年後にしか元の世界に戻ることでないらしい。詳しくいろいろ聞きたいのだが、日が落ちると移動ができなくて危険だからの一点張りだ。何が危険なのか聞いても、説明が長くなるから、乗っての一方通行に、亜季は小さくため息をついた。

「ミラーと二人乗りはできないの？」

乗るのはどうにも避けられないらしいが、一人乗りは無理だと妥協案を出した。

「フォー又は無理、力がないんだ。二人も乗ったら重さで飛ぶことはできない。」

僕だって、町の宿に荷物を置いてきて身一つで来ているだろう？人間一人なら乗せれるけど、二人になると滑空すらできるか怪しい。亜季が地面にぶつかることを怖がっているなら、別々に乗ったほうが安全なんだ」

「・・・・・・」

「僕に置いていかれて、食事なし水なし山の中腹で放置されたいの？」

「・・・・乗ります」

恐怖はあるものの、放置よりはましだと亜季は押し付けられた手綱をとった。

おしゃべりで人の話を聞かないミラーだが、親切に乗り方を教えてくれる。フォー又はの背中に取り付けられた椅子のような物にはベルトがついていて自分の腰と肩にガッチリと固定されることを知ると、亜季はほっとした。少なくとも空中に放り出される点はなさそうだ。

「じゃ行くよ」

前のミラーの乗ったフォー又はがぐつと腰をかがめると両翼を広げる。数度羽ばたくとふわりと舞い上がるのに亜季のフォー又はもついて行くこうと同じく腰をかがめた。恐怖で目を閉じると、頬をやわらかく風がなでる感触がして、飛んでいるのが分かる。

ジェットコースターのような気持ちの悪いフワフワとした感覚がないので、亜季はおそろおそろ目をあけた。

「揺れてない」

予想とはまったく違っていて驚いた。鳥なのだから、さぞ上下に

揺れるのだろうと思っていたが、地面を離れるために数度羽ばたいて上下したものの、すぐ翼を広げたまま気流に乗って安定した飛行だ。

子供みたいに怖がって馬鹿みたい。笑い出したいような気持ちになる。

本当に一年で戻れるのなら、誰も体験したことのないファンタジーの世界も悪くないかもしれない。

ファンタジー

15分も乗っていると、下に小さな集落のような建物が見えてくる。よく見ようと、亜季が身を乗り出そうとすると、フォーヌがくええええと可愛くない泣き声をたてた。座れといっているようだ。乗せている方だつて自分に比べて人間が小さいとはいえ空中では不安定になるだろうと、素直に重心を戻す。

先ほどまで自分がいたのは、山の中腹だったようで、気流に乗りながらゆっくりと降りてくると風景も段々と変わるのが珍しい。きよるきよる景色を眺めているうちに集落から少し離れた場所に降りた。

「さつき上から広場が見えたけど、何で離れた場所に降りるの？」

亜季が聞くと、ミラーは親切に答えてくれる。

「上空から巨大な鳥が降りてきてごらんよ、普通は驚くだろう。騎獣は郊外に下りて町の中は引いて歩くか、背中に乗って歩かせる程度なんだ。違反すれば警備兵から罰金を取られる」

ファンタジーの世界とはいえ、地球とルールはあまり変わらないようだと感じた。日本だつて街の中にヘリコプターを降ろしたり、車を暴走させたりはしない。

集落の入り口にある倉庫のような建物で二羽のフォーヌの手綱を渡して預けると、ミラーに素直について宿らしき建物に入った。

町につくまで説明をしてくれたが、きよるきよるすぎると不審者だと思われるので普通にしていって欲しいと言われて帽子のようなものをすっぱり被せられている。中からは外が見えるが、外からはのぞけないという不思議な布地でできている。かぶっている方が不審者だよと亜季が言くと、大丈夫だと太鼓判を押された。日に焼けたくない女性が時々使うことがあるらしい。

「もう帽子を脱いでもいいよ」

ベットが二つに、いくつか家具の並んだかわいらしい部屋に入ると、暗くなりつつある部屋のランプに火を入れながらミラーが教えてくれる。

「宿についたら、説明してくれるってミラーは言ってたよね」

色々と教えて欲しいことがあるのだ。私があの場合にいて当然という態度だったし、移動に自分の分だけではなく、もう一人分用意していたという事は、知っているのだ。岩の上に一人の人間が現れる事を。

「うん」

返事をしながら、宿の受付で渡してもらったバックから小さな本を取り出した。

「夕食は部屋に運んでもらうから、食事までは僕が説明するよ。食後に本を読むといい、昔のソーターが書いたものだから、亜季が知りたいと思う内容が分かると思う」

「ソーター？」

聞きなれない言葉に亜季は首をかしげた。

「異世界からきて、こちらで《忘れ物》を探す役目のものをソーターと言うんだ。」

国に12箇所、君が乗っていたような岩があって、出現場所は毎回違うが、毎年一人が召還されている。

一年間、忘れ物を搜索したら、成功・不成功にかかわらず王宮から元の世界に送り返してもらうことができる」

「帰れるんだよね？確実に」

恐る恐る聞くが、ミラーは大丈夫だとうなづいた。

「君は神隠しとか行方不明って聞いたことがない？」

「ニュースではあるけど」

「君が来た世界では、広い場所でたくさんの方が住んでいると聞い

ているよ。結構な人数が行方不明になっているはずだ、行方不明になる人物のうち年一人が、ソーターという訳。

ソーターになるのは、幾つか条件があるみたいだけどね、よくは分かってはいない」

「珍しいの？」

「珍しいは珍しいね、でも毎年一人が来ているから恒例行事のようになっているかな。大昔は、不思議な現象だと研究していたけど、今だに理由は分からないんだ」

トントン。扉がノックされると廊下から夕食ですと声がする。
「食事だ。後は自分で読んでみて」

夕食

ガラガラとカートに乗せられた蓋がついた鍋と、籠に盛ってあるパンのような丸いものを部屋に入れると、おやすみなさいと言いなから宿の人は部屋から出ていった。私達は今から夕食だつていうのに、おやすみは早すぎるような気がするのだけど、習慣なのかもしれない。

「うわ、おいしそう」

亜季は早速、鍋の蓋を開ける。中には野菜がいくつも入っている具沢山スープが入っている。思い起こせば、夕食を食べずに親友に電話した事もあり、かなりの時間食事をとっていなかった。美味しそうな匂いにお腹がグーとなりそうになる。

部屋にある小さなテーブルに盛り付けると、早速食べ始める。ミラーは始終無言で、時々目をこすりながらだったから、眠いのだろうと思った。食事までは質問は受けるけど、後は本を読んでたし、親切に聞いたことは答えてくれるのだから、質問に答えたくはないという訳でもなさそうだ。

色々な野菜と少しの肉が煮込まれたスープは、シンプルな味付けながら美味しく、海外で食事が口に合わなくて困るということとはなさそうだ。パンもときは、驚いたことに木の実らしい。ちぎって食べると小麦の風味がするのに不思議だが、どの家の庭にも植える一般的なものだとして納得する。来る途中、あちこちに、りんごくらいのサイズの実がぶら下がっている木を見たからだ。

「良かった美味しくって。一年過ぎすにしても、ご飯がまずいとどうしようもないから」

「うん」

「ソーターって何するのか分からないけど、しなくてもいいものなの？」

「うん」

「忘れ物っていうのを探すんでしょ？」

「うーん」

「スープに入ってる肉って、おいしいからいいけど、どんな動物？」

「ごめん、眠くて我慢できない。明日にして」

もぐもぐと食べながら生返事と欠伸を繰り返すミラーは、部屋の明かりもそのままにベットにもぐりこんでしまった。テーブルには半分ほど夕食が残っているし、洋服も着替えせずにそのままだ。もちろんお風呂にも入っていない。

「早っ」

少し暗くなっていた程度から、完全に日が落ちて30分も経っていないのにご就寝なんて、信じられない。迎えに来るのに移動をしているだろうし、無理をして疲れていたんだろうか。

一人で、食事を食べるとカートを廊下に出しておく。あまり長くない廊下だが、左右に扉がついていて、別室の前にも同じようにカートが出してあったので同じようにする。他に宿泊客がいるのに、シーンとした廊下が少し怖い。

「もう寝ちゃったの？ミラー起きてる？」

独り言を言いながら、覗き込むと、横向きになった金髪が顔にかかっているミラーは熟睡しているのかピクリとも動かない。自分のことにイッパイイッパイだったので、ミラーの事は金髪とオレンジの目という色ばかり気になっていたが、結構美男子だ。少し一方通行きみな性格だけど、悪い人物ではないし、何より知らない世界でお金を一円も持っていない身分としては、頼るしかない。

先はどうなるんだろう。

ぼんやり考えてみても今は何もできない気がする。

まさか、夜に一人で出歩くわけにもいかないの、先ほどもらった本を明かりの下で読み始めた。

日記のように書かれていて、最初の数日は混乱している様子が文章から見て取れる。日常生活の違いについて書かれているのが殆どだ。

早乙女と書かれた本の最初の持ち主は、亜季と同じように魔道士が迎えにきたと書いてあった。筆まめな人らしく、日常のこまごました事が丁寧に書かれている。

忘れ物と呼ばれる何かを探すのが役目と聞かされたと書かれている箇所には、この異世界にきた理由が分かってほっとしたと書かれている反面、どうやって探せばいいのか分からないと混乱もしている。

ぺらぺらと読み進めているうちに、亜季の頬が赤くなってきた。我慢できずに本を閉じる。

な、な、なにこれ！！

ソーターという役割について書かれているのは、数日分しかなかった、逆に、早乙女という女性が同行している魔道士に片思いをしている文章が増えてくる。

彼が笑ってくれたとか、手をつないだとか、ページがすすむにつれ好きという言葉が多くなってくる。うわあああああ、と夜中になれば、叫びたくなるような恥ずかしい文章になってきて、亜季は机に突っ伏した。

日記

本の続きを読む気にはなれない。この異世界について前駆者の書いた文章を読めば、多少は理解できるだろうと思っていたけれど、人のプライバシーだらけの日記だなんて思っていなかったからだ。ミラーは内容を知っていて私に渡したんだろうか、だとしたら人が悪すぎる。明日、目が覚めたら問いただす気が満々だった。知ってるよとしらりと言ったら、一発くらいお見舞いしてもいいだろう。

書かれた文章の日付が2日目を超えた箇所から、魔道士がかっこいいとか、やさしくしてくれたとか、？と思う箇所があった。混乱していて、孤立している人間は、誘拐者ですら一緒にいると恋愛を抱くらしい、いわゆる>つりばし効果<という心理現象だ。

不安な状況で、保護してくれそうな人物と一緒に行動をすれば、異性ならば恋愛に陥りやすい。知識として知っていたので納得はできた。

日記は、一週間目からは、転びそうな手を引っ張ってくれて、抱きしめられて息が止まりそうなほど驚いたとか、恋愛バリバリの文章だったのだ。キスをされて、足から力が抜けたのはなぜだろうという箇所、夜中ではなければ叫びだすところだった。こっぴどくなくって。

恋愛小説くらい平気で読むし、別に男女がどうこうするのは分かっている。男の人の読む一方的な性の雑誌があるのも知ってるし、女の子だって、かなりリアルな本も読むのだ。恋愛について、何も知らないよなんて言い切るつもりもないけど、個人的な日記については別だ。

続きがどうなるのか、気にはなるけど、呼んでしまえば覗き見を

しているようで嫌だ。まあ、きっと、なるようになったんだろうと思う。

肝心のソーターについてなんて、一行も書かれてはいない。途中までしか読んでいないけれど、日記の持ち主の早乙女という人物は、同行している魔道士について一色の文章だったので、忘れ物は見つけなかったんだろう。きっとそうだ。

本はそのままテーブルに置くと、ベットで眠るミラーをちらりと見た。

つりばし効果、つりばし効果。不安な状況にあると、身近な異性を魅力的だと思ってしまふのだ、私はだまされないぞ、呪文のように言い聞かせる。

異世界からきた見ず知らずの人間が同室だというのに、不審には思わないのだろうか、この男は。

荷物を盗んで、財布をとって逃亡、、、すれば、元の世界に戻れなくなってしまうので、盗みをされる心配はないってことなんだろうか。それとも、人を疑うことのない性格なんだろうか。

何も考えずに、すーすー寝息をたてる金髪の魔道士がうらやましい。

「とりあえず寝るしかないか」

明かりの消し方など分からない。中身のオイルが無くなれば勝手に消えるだろうから、そのままにしておくことにした。消してしまつて、真っ暗になつても怖いというのもある。

「おやすみなさい」

返事がない相手に寝る前の挨拶をして。亜季は目を閉じた。

番外編 早乙女日記

一日目

朝、起きてトイレの扉を開けて何も考えなく入って扉を閉めたら、全く知らない場所にいた。

そばには、一人、金髪の男性が立っていて、混乱する私を落ち着かせようと何か食べ物らしきカラフルな包みを差し出してくれる。怖くて手を払うと、悲しそうな顔をされた。

泣き出す私に、もとの世界に帰れるのだと金髪の男性は言うが、一年後になるという。我慢できずに、また泣き出すと、夜になると危ないから移動しようといって手を差し出してくる。

また、さっきみたいに手を払ったら悲しそうな顔をしそうなので、従ったけど、怖くて不安でしようがない。

部屋についたら、この本をくれた。本のような丁寧な装丁だが、手帳のようなものらしい。つらいことは日記を書くとしつきりするんだと言われて納得する。

日が落ちると同時に、男は眠ってしまった。私は明かりの下で、一日目の日記を書いている。早く一年が過ぎるといい。本当に帰れるんだらうか。

二日目

眠りながら泣いていたらしい。目ははれぼったいのを見て、かっこいい金髪の男性はぬれタオルを用意してくれた。私が起きたのは男が目覚めてから随分後らしく、部屋に朝食の用意が済ませてある。男と一緒に食事をとった。彼の名前はシュツドルティン・エリリエス。一年に一度異世界からの客人を迎えに来た公認魔道士だと自己紹介を受ける。魔法？さすがは、違う世界だ。

エリアリエスは、きちんとした自己紹介をしてくれた。昨日は手を振り払って申し訳なかったと言うと、笑って許してくれた。よかった。笑うと子供みたいにかわいい人だなと思う。

色々と怖いし、どうすればいいのか分からないけど、今は大丈夫そうだと思う。がんばろう。毎年誰かが来ては帰っていると聞いたので安心した。

三日目

王都に移動中。毎年来る異世界からの客人に任命される事があるので、王に会いに行くとアリエスは言っていた。首の長い変な動物に乗るように言われる。出来ないと後ろに下がって怖がると、自分が触ってみせて怖くないと証明してから、私の手を握って優しく触らせてくれる。ふさふさした毛の生き物で、触れると暖かかったけど、なぜか私の顔が真っ赤になった。子供みたいに、怖がったのが恥ずかしかったせいだと思う。光にエリアリエスの金髪がすけてみえると綺麗でうらやましい。私が黒髪じゃなかったらいいのに。

四日目

エリアリエスと呼びにくいなあと思っていたのが聞こえたらしい、アリエスと親しい人には呼ばれてるからと教えてくれた。

まだ移動中。おしりが痛くなってきた。昼食の時に言うと、アリエスは分かりましたと言ってくれた。座布団を期待していたのに、午後に移動する時には、なぜか彼の膝の上に乗る事になった。すごく恥ずかしいのに、うれしいのはなんでだろう。

夜、日が落ちると同時に眠ってるアリエスの鼻をつまんで復讐する。すっきりした。

五日目

明日には到着すると教えてもらう。おしりの痛みはよくなったけど、恥ずかしくてしょうがない。カーテンみたいな帽子をずっとかぶっているので見られないで本当によかった。

一日目はたくさん不安で怖かったけど、アリエスが説明してくれるこの世界が興味深くて楽しい。一年過ごすのはできそうだと思う。休憩のとき、騎獣から降りるときにふらついて倒れそうになったらアリエスが抱きしめてくれた。細いののに、力があるのに驚く。女性みたいなのに美人なのに、男性なんだと自覚する。本当に驚いた。

六日目

すごい人でいっぱい王都につく。王様に謁見出来る時間帯は午前中のみなので、明日会う事になった。午後時間があるので買い物をする事になる。やっと着替えを買ってほっとして店を出たら、店の外で待っていてくれたアリエスが差し出してくれたのは、色とりどりのお菓子。

見た覚えがあるなと思って、ありがとうと言って受け取ると、私とであった時に渡そうとしていたものだ気がつく。どんな女性が異世界から来るのか楽しみで、王都で買ったんだと聞いて胸がどきどきした。どうしよう。明日、王宮に行くのは緊張してどきどきするけど、それとは違う気がする。気もそぞろで転びそうになってアリエスに抱きしめて助けてもらった。

七日目

王宮は美しく、たくさんの廊下と部屋を通つてくらくらした。迷いそうだと言ったら、笑われてしまう。王は威厳のある老人だが、目が優しくいい人だった。

私は、ソーターと呼ばれる存在で、一年間忘れ物を捜すのが役目だと教えられる。何かを見つけるのが仕事らしい。何かというのは、

異世界から来た人間にしか発見できないから、うまく説明できないと言われた。

一年に必要な経費、その他護衛もつけてもらう。

帰りの保障もされているし、役目があつてこの世界に来たんだと思うとほっとした。過去では忘れ物を見つけた人物の方が断然少ないらしい。見つからなくても大丈夫だと言われた、お菓子や洋服の技術、色々な知識が伝わって発展したりして、異世界から人が来ることは国にとって利益なのだと教えてもらえる。

八日目

アリエスを怒らせたのだろうか？昨日とは違って、いらいらしているように見える。

昨日決まった護衛のエラが苦笑していた。エラは分厚い皮の防具を着ている大男だ。背は高いし筋肉がすごいけど、目がたれ目で優しそう。炎のように真っ赤な髪の毛の持ち主だ。本当にカラフルな人が多すぎる。色鉛筆みたい。あまりにすごい色なので、何度もまじまじと見つめてしまう。エラがアリエスが険悪になるから、珍しい色だからってまじまじと見ないでくれと耳打ちしてきた。なぜ？

今日からアリエスとエラと私の三人で、国中を旅する。旅とはいっても、気になった町に滞在でもいいらしい。一週間ほど王都を探索してからにしようかと決定。

城下を一望できる展望台を見に行った。エラはなぜか登らないで出入り口を見張っていると言いつ張る。いい景色らしいのに、なぜだろうかと思ったけど、階段がたくさんで疲れるからなんだろうと分かった。ぐるぐる登ってやっとアリエスと到着する。

やっと二人きりだねと言われてアリエスに抱き寄せられて、口付けを、って日記に書くのも恥ずかしいけど、口付けされると足に力が入らなくなるのは何故だろう。私のことを好きって言うって、うっきゃああ、書けない。この日記、誰も読めないよね？日本語な

んだもん。私も、アリエスが好きだと伝えた。

翌朝

「おはようございます」

まだ眠いののに、起こすなんて誰だろう。お母さんじゃなさそうだし。反対側にもぞもぞと動いた。

「出発する時間になるんで、起きてください」

目覚まし、壊れたのかなあ。電池きれてたっけ、ってか誰の声だろう。男性の声のような気がする。気のせいだろうけど。

悲しいかな、おはようコールをしてくれる彼氏もない。とすると、声が聞こえるのは夢のせいなんだろう、お布団が気持ちいいなあ、あったかい。昨日、お母さんが干しておいてくれたんだろう、太陽のようなにおいがして、ふわふわだ。枕も、いつもの自分のじゃないみたいになんてやわらかい。気持ちよすぎる。

「全くもう、日がのぼる時間どころじゃないですよ。信じられない。大体、年頃の女性だっていうのに、男と同室で熟睡するし、あ、母さんも昔そうだったな。女性って、変なところで鈍感なところがあるから。」

亜季、朝ですよ、いや、このままでは、もうすぐ昼ですよ。

おーきーてーくーだーさい。おきて。おきるんだ。起きる時です。おきろおおおx」

がっさがっさと体中をゆすぶられて、私も目が覚めた。

「起きる」の新しい五段活用の効果は抜群だった。ぱちりと目がさめた私の目の前には、まぶしいばかりの朝日の透ける金髪と、どアップのオレンジの瞳。

「うつぎやああ、誰!!」

寝起きに美少年はきつい。

「誰とか聞かれても、昨日自己紹介はしましたが。もう一度いりますか？」

起きて、着替えして、顔洗ってください。朝食のプレートを食堂に取りにいきます。

全部すむまで鍵はかけといてください。着替え中にはちあわせなんて困るだろうし」

「はい」

「気持ちよく眠れたみたいでよかった。

恐怖で泣きつかれて眠れないなんて事態じゃないのはいいいけどね」

「はい」

なんか、それってけなされている？ミラーは案外ちよっぴり腹黒かもしれない。

扉を開けて「もう目が覚めてるよね」と確認しながら苦笑を浮かべる男に、裏があるような気がしてきた。昨日の出会いを思い出して亜季は真っ赤になった。

なんていうか、はずかしすぎる。小さい声で返事をする、もぞもぞと起き出した。

枕元にある用意されたワンピースのような服は横にスリットの入っていてアオザイを彷彿とさせるデザインで動きやすい。下はゆつたりとした紐で締めるズボンのようなものをはく。

かわいいかも。

着替え終わってみると、洋服には裾や襟などのそこかしこに小さな花の刺繍が入っていたり、ズボンのようなものもレースがあしらわれていてかわいらしい。とっぴょうしもないドレスではなくてぽつとした。

部屋に用意されている洗面器に張られた水で顔を洗うと、鏡には不安そうな自分がうつっていた。

「しっかりしろ亜季。一年で戻れるって話だし、とりあえず怪我もないし生きてるし大丈夫そうなんだから。逆に楽しまなきゃ遜」
自分に言い聞かせる。

とんとん

控えめなノックの音にあわてて扉を開けると、おいしそうな匂いのするプレートを二つもったミラーがいた。

「食べてくださいね、日記読みました？多分書いてると思うから説明は省きますけど、ソーターは王と面会するんです。聞きたいことあったら、移動しながらにしてください、寝坊したんで予定より遅くなっちゃいそうなんです。今日から王都まで移動しなくちゃいけないので体力つけてくださいね」

「あー、日記ね、、、」

「異界語なんで僕には読めませんが、日記って行動予定表みたいなものだって聞きました」

ミラー、君は誤解してるよ。

私はがっくりと肩をおとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306o/>

忘れ物

2011年4月12日21時55分発行